

壽量院

壽量院は最も重要な塔頭寺院と考えられている。1174 年に後白河法皇（1127-1192）が圓教寺に 1 週間にわたって参籠されたという特別な格式を誇っている。現在の構造は古典的な寝殿造りと初期の書院造りを調和させた建築様式である。書院造は、床の間、違い棚、内部の襖仕切り、畳の間が典型である。中央の仏殿には、悟りを保証してくださる極楽が描かれた当麻曼荼羅の模写が飾られている。

玄関広間と唐破風を備えた切妻屋根の優雅な門は、壽量院の居住部分と、台所を設けた庫裏の部分とに分けられている。一つの部屋には書寫山で有名ないろいろな形の鮮やかな朱色の書写塗の漆器が展示されている。現在壽量院は結婚式やほかのプライベートな行事にも利用されている。予約すると、書写塗りの漆器に盛られた伝統的な精進料理を楽しむことが可能である。